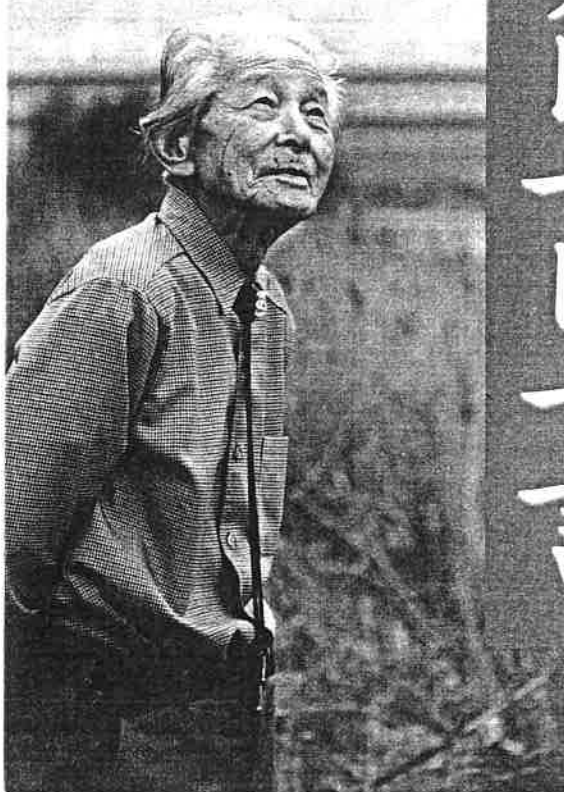


令和三年四月十四日

人間学セミナー

坂村真民の詩に学ぶ

坂村真民一日一言



坂村真民 著

人生の詩、一念の言葉

7月13日

① しんみん訓

クヨクヨオラオラ
フラフラオラオラ
グラグラオラオラ
ボヤボヤオラオラ
ペコペコオラオラ
鳩壽三由民

1月

1日 願い

日本を
楽しい国にしよう
明るい国にしよう
国は小さいけれど
住みよい国にしよう
日本に生まれてきてよかったと
言えるような
国造りをしよう
これが二十一世紀の日本への
わたしの願いだ

3日 一心不乱

美しく生きるとは
一筋に生きることだ
一筋に生きるとは
自分を生かす一つのことだ
一心不乱になることだ
一心不乱とは
神意にただ従うことだ
フラフラするな
グラグラするな
ウコサベンするな

2日 心構え

新しい年を迎えるには、新しい心構えが
なくてはならぬ。決してただ漫然と迎えて
はならぬ。そしてその心構えには年相応の
ものがなくてはならぬ。五十代には五十代
の心構え、七十代には七十代の心構えが大
切である。還暦になったんだから、古稀に
なったんだからという妥協は、自己を深淵
に落ち込ませるだけである。

4日 生きるのだ

いのちいっぱい
生きるのだ
念じ念じて
生きるのだ
一度しかない人生を
何か世のため人のため
自分にできることをして
この身を捧げ
生きるのだ

5月

31日 一貫

一貫で貫く
わたしは
これが好きだ
わたしは
愚か者だから
これしか
できないのだ
一貫の詩
一貫の愛
一貫の師
これが
しんみんの
生き方だ

7月

30日 心棒

独楽こまが回るのは
心棒があるからだ
しんみんの心棒は
念ずれば花ひらく
大宇宙大和楽

14日

尊いのは足の裏である ①

尊いのは
頭でなく
手でなく
足の裏である
一生人に知られず
一生きたない処と接し
黙々として
その努めを果してゆく
足の裏が教えるもの
しんみんよ
足の裏的な仕事をし
足の裏的な人間になれ

15日

尊いのは足の裏である ②

頭から
光が出る
まだまだだめ
額から
光が出る
まだまだいかん
足の裏から
光が出る
そのような方こそ
本心に偉い人である

18日

かなしみはいつも

かなしみは
みんな書いてはならない
かなしみは
みんな話してはならない
かなしみは
わたしたちを強くする根
かなしみは
わたしたちを支えている幹
かなしみは
わたしたちを美しくする花
かなしみは
いつも枯らしてはならない
かなしみは
いつも湛えていなくてはならない
かなしみは
いつも噛みしめていなくてはならない

10日

本気

本気になると
世界が変わってくる
自分が変わってくる
変わってこなかったら
まだ本気になってない証拠だ
本気な恋
ああ
人間一度
こいつを
つかまんことには

あるがままに (80歳)

才なき人は才なきままに
処するがよい
花にたとえるなら侘助のように
鳥にたとえるならみそさざいのように
おのれの花を咲かせ
おのれの歌をうたい
嘆かず訴えず
なにごともあるがままに
生きるのが一番よい

砥石 (93歳)

砥部は砥石の産地である
砥部の砥石で

己れを磨け
と書いて

部屋に張っているが
いくつになっても
これでいいということにはなれない
結局は

すみません
すみませんと
お詫びしながら
世を終わるであろう

10日

鈍刀を磨く

鈍刀をいくら磨いても
無駄なことだというが
何もそんなことばに
耳を借す必要はない
せつせと磨くのだ
刀は光らないかも知れないが
磨く本人が変わってくる
つまり刀がすまぬすまぬと言いながら
磨く本人を
光るものにしてくれるのだ
そこが甚深微妙の世界だ
だからせつせと磨くのだ

20日

年齢

年をとることはいいことだ
これまで何度読んでも
わからなかった言葉が
次第にわかるようになった
我執をはなれ
煩惱をのがれ
物をも人をも
善意の眼で見ることができるようになった
中国の人が年齢を尊ぶ所以も
漸くわかってきた

鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ

怒濤の海を

飛びゆく鳥のように

混沌の世を生きねばならぬ

鳥は本能的に

暗黒を突破すれば

光明の島に着くことを知っている

そのように人も

一寸先は闇ではなく

光であることを知らねばならぬ

新しい年を迎えた日の朝

わたしに与えられた命題

鳥は飛ばねばならぬ

人は生きねばならぬ

3月

日

1日

念ずれば花ひらく

念ずれば

花ひらく

苦しいとき

母がいつも口にしていた

このことばを

わたしもいつのころからか

となえるようになった

そうしてそのたび

わたしの花がふしぎと

ひとつひとつ

ひらいていった

念ずれば
花ひらく

九十六歳 坂井孝彦

Pray, and Any Flower of Yours Will Come Out

When (Mother was) in a painful position,
Mother always said this saying to herself.
I also began to chant the words one day
without being conscious of it.
Every time I recited them since then,
I felt, to my wonder, a flower of mine
coming out, one after another.

英訳 坂井孝彦 (名古屋大学卒. 通訳案内業)
英文監修 Frances Ford (サンフランシスコ州立大学卒)

Birds Must Fly

Birds must fly;
we must live.
Just like birds flying over the roaring rough seas,
we must live through the world
of chaos and confusion.
Birds instinctively [by instinct] knows
that they will reach the island of hope
after the breakthrough of darkness.
Just as they do, we must know
that the future won't be a dark sealed book
but a glorious hope [a glory].
On the morning of the first day in every New Year,
I receive the following proposition:
Birds must fly;
humans must live.

1月20日

「二度とない人生だから」

Since We Do Not Live Here in This World Twice

Since we do not live here in this world twice,
let's pour a vast amount of affection,
even upon a single lonely flower;
let's carefully listen to a bird chirping and twittering,
with ourselves removed.

Since we do not live here in this world twice,
let's take a careful step
so as not to tread
even a cricket down to death.
How grateful to you it is for your considerate care-taking!

Since we do not live here in this world twice,
let's write a letter to anyone just once more,
in addition to the many letters you have sent before.
Let's write an answer without fail.

Since we do not live here in this world twice,
let's do what we can to anyone
nearest to us, first of all.
Even if we are poorly off,
let's be close to anyone with all our hearts.

Since we do not live here in this world twice,
let's stop to carefully look at dewdrops
on leaves of dayflowers,
thinking deeply of the wonders of the encounter.

Since we do not live here in this world twice,
let's feel refreshed, day after day,
by watching the sun rise and set, as well as the
moon waxing to the full and waning to the new,
and by being touched with a variety of stars
appearing in different forms dependent on seasons,
far and broad in the sky.

Since we do not live here in this world twice,
let's strive to make our dream come true that
war will not break out among all of us.
I will compose as many poems of this sort
as I can, always with spirit of composing just one
more piece of such a poem in mind.
After my death,
the young will follow my way of thinking.
For those people
I will keep on composing such poems
to make our great dream come into reality.

致知 2004年2月号 特集「一道を行く」坂村真民の世界 あり



不尽叢書刊行会代表

寺田 一清

てらだ いっせい 昭和2年大阪府生まれ。旧制岸和田中学を卒業し東亜外事専門学校に進むも中退。以後、家業の呉服商に従事。40年以降、教育者・森信三氏に師事。著作の編集発行を担当する。森氏亡き後はその教えを継承する。「実践者の家」常務理事も務めた。現在不尽叢書刊行会代表。著書、編書に「心願に生きる」「心魂に響く言葉」（いずれも致知出版社）など多数。

「この石が私を待っていた」

寺田 敬愛する坂村真民先生が毎月お出しになっていた個人詩誌『詩国』が、創刊から四十二年を経て、この一月で宿願の五百号を成就されました。真民先生ご自身もめでたく九十五歳を迎えられ、このまたとない機会に鍵山さんとの対談のご命をいただいて、誠に光栄の至りです。

鍵山 私もこのたびの対談はとても楽しみにしておりました。ただ、私は個人的に真民先生が好きで、真民先生の書に感動しているというだけですから、真民先生について寺田さんの前で得々とお話をするような資格はないのです。

寺田 いや、私のほうこそ鍵山さんのお相手というごことで、大変責任を感じておるのですよ。鍵山さんは真民先生とはどのようなご縁で？

鍵山 いま、真民先生の窓口になって、「詩国」の発送や詩集の出版などのお世話をされている片山克さんが銀行の支店長の頃に、支店で坂村真民展を開かれましたね。お世話になっていたうちのお得意先を通じて、ぜひ見に来

九十五歳、一念一徹の詩人の生き方に学ぶ

四十余年にわたる黙々たる掃除の実践が、社会に大きな共感の渦を巻き起した鍵山秀三郎氏。国民教育の友と謳われた人生の達人・森信三氏に師事し、その貴い教えを弘布し続ける寺田一清氏。坂村真民先生の一道を貫く姿勢であり、詩であった。鍵山氏と寺田氏に、その人生と作品を振り返りながら、そこから学ぶべきものについて語り合っていた。

◎対談——鍵山秀三郎 & 寺田一清



イエローハット相談役

鍵山 秀三郎

かみやま ひでさぶろう 昭和8年東京生まれ。27年疎開先の岐阜県立東濃高等学校卒業。28年アトロイト商会入社。36年ローヤルを創業し社長に就任。平成9年社名をイエローハットに変更。10年同社相談役となる。創業以来続けている掃除に多くの人が共鳴し、近年は掃除運動が内外に広がっている。日本を美しくする会「相談役」著書に『凡事徹底』鍵山秀三郎語録『小さな実践の一本から』日々これ掃除（いずれも致知出版社）がある。1月下旬に新刊『掃除に学んだ人生の法則』が小社より発刊される予定です。

てくれと言われて一緒に伺ったのです。それがご縁で、片山さんが銀行を退職された後、真民先生のところに連れていかれたのでした。先生には書を求めないでほしいとお聞きしておりました。もちろん私もそんなつもりはなかったのですが、真民先生は、その場で次々と書を出してくださり、「これを持っていきなさい」「これも持っていきなさい」とくださったのです。

寺田 ああ、そうでしたか。せっかくなので機会ですから、このたびの対談の前に、改めて真民先生の足跡を振り返り、全集にもザッと目を通してみました。

好きな詩はたくさんありまして、一つだけ挙げよと言われると非常に迷うのですが、真民先生の代表作というところでしたら、やはりなんと云っても「二度とない人生だから」ではないかと思うのです。

二度とない人生だから
一輪の花にも
無限の愛を
そそいでゆこう
一羽の鳥の声にも
無心の耳を
かたむけてゆこう

一度とない人生だから
一匹のおおろぎでも
ふみころさないように
こころしてゆこう
どんなにか
よろこぶことだろう

二度とない人生だから
一べんでも多く
便りをしよう
返事は必ず
書くことにしよう

二度とない人生だから
まず一番身近な者たちに
できるだけのことをしよう
貧しいけれど
こころ豊かに接してゆこう

二度とない人生だから
つゆくさのつゆにも
めぐりあいのふしぎを思い
足をとどめてみつめてゆこう

二度とない人生だから
のぼる日しむ日
まるい月かけてゆく月
四季それぞれの

星々の光にふれて
わがこころを
あらいきよめてゆこう
二度とない人生だから
戦争のない世の
実現に努力し
そういう詩を
一篇でも多く
作ってゆこう
わたしが死んだら
あとをついでくれる
若い人たちのために
この大願を
書きつづけてゆこう



「真民先生の詩を通じて信というものを学びたいですね」

鍵山さんの「イエローハート」には、この詩を全文刻んだ詩碑がありますね。詩を刻んだ石で、あれだけの巨大なものを見たことがありません。
鍵山 山口の物流センターにある詩碑ですね。あれは一枚の石に詩を刻んだものですが、同じサイズのものがある以外にも恵那(岐阜県)の「博石館」と、御殿場(静岡県)の「ホテル時の栖」という所にあります。いずれも真民先生に書いていただいた同じ一枚の原稿で造ったものです。
寺田 三基もあるんですね。
鍵山 はい。もともと恵那の山奥にあった石でしてね。機械で切り出したものなら大きなものはいくらでもあるのですが、それでは脆くて壊れやすいそうですね。自然の石目で割ったものは非常に強く、価値があるわけですね。しかし自然の石の目は真つすぐではありませんが、そんなに大きく平たく割れないのですが、その石はたまたま大きく割れていたのです。
それを見つけた時から、この石に「二度とない人生だから」の詩を刻めばきつと後世に残るものになると思っていたのです。それで真民先生をご案内して見ていただいたら、非常に喜んでくださって「この石が私を待っていた」

とおっしゃって、すぐにその石は合った字を書いてくださったのです。
寺田 真民先生はその時のことを詩にも書いておられますから、本当に感激されたのでしょうかね。
鍵山 はい。私も、「二度とない人生だから」は真民先生を代表する詩だと思っておりますけれども、人様に真民先生のことを紹介する時には、「なやめるS子に」がどなたにも伝わりやすいのではと思うものですから。
寺田 真民先生は数え切れないくらい詩を書かれていますね、鍵山さんは講演ではよく「なやめるS子に」を紹介されていますね。
鍵山 はい。私も、「二度とない人生だから」は真民先生を代表する詩だと思っておりますけれども、人様に真民先生のことを紹介する時には、「なやめるS子に」がどなたにも伝わりやすいのではと思うものですから。
だまされてよくなり
悪くなってしまうのは駄目
いじめられてよくなり
いじめてしまったのは駄目
ふまれておきあがり
倒れてしまったのは駄目
いつも心は燃えていよう
消えてしまったのは駄目
いつも瞳は澄んでいよう
濁ってしまったのは駄目

特に最後の「いつも心は燃えていよう 消えてしまつては駄目」「いつも瞳は澄んでいよう 濁ってしまったのは駄目」の二小節は大事にしよう、といつても自分に言い聞かせています。どうしても人間は、人とつまらな競争をしたり、人をやつつけてやろう、相手を倒してやろうというような考えになりますと、瞳が濁ってきます。できればいつも子どものような澄んだ瞳でいたいです。

寺田 同感ですね。そういう意味では、「七字のうた」というのも分かりやすいのではないかと思いますね。

よわねをはくなくよくよするな
なきごとというな
うしろをむくな

ひとつをねがい
ひとつをしとげ
はなをさかせよ
よいみをむすべ

すずめはすずめ
やなぎはやなぎ
まつにまつかぜ
ばらにばらのか



「真民先生の詩に感動できることが幸せです」

いつも嵐が吹いている
それが詩人というものだ

寺田 坂村真民先生のごことは、一般には仏教詩人といわれています。確かに真民先生は仏教を深く究めていらつしゃいますが、私は仏教詩人というよりも、もっと適切な言い方があるのではないかと思うのです。
鍵山 私が非常に感銘を受けておりますのが、「嵐と詩人」という二行詩です。

いつも嵐が吹いている
それが詩人というものだ

この短い二行詩の中に、真民先生の生き方が凝縮されているような気がします。
寺田 確かに真民先生という人は、厳しい行の人ですね。
かつて真民先生は、「巖をば花ひらかず 信心清浄なれば 花ひらいて仏を見たてまつる」という一句を見つけたために、「大蔵経」を三度も読まれた。「大蔵経」というのはとつともなく膨大な仏典ですから、その一句を見つけて出すというのは、海の中に落ちた珠を柄杓ですくうようなものです。そういう厳しい課題を自身に課したこと、目は失明寸前までいってしまひ、同時に脾臓がん、胃がんの宣告を受け、腸まで病んでしまわれる。
しかし、それらをすべて信仰、祈りといったもので克服して今日まで詩作を続けてこられました。
まず臍下丹田で呼吸する丹田法、足の裏で呼吸する足心呼吸法を実践された。そして睡眠時間も実に独特で、夕方の五時におやすみになって午前零時、長針と短針がピタリと重なった時に起きられて仕事をし、午前三時三十分になると庭の柿の木の下にある詩碑の前で「寅の一刻」の祈りをなさる。それが済むと、家を出て近所を流れる重

信川の橋を渡り、河原で朝の日を仰いで光を吸飲しながら「彼岸の祈り」をする。こうした毎日の行が長寿につながっているとおっしゃっていますね。
寺田 ですから真民先生は、仏教詩人という表現でくるよりも、むしろ行の詩人、求道の詩人と言った方がいいかと思ひます。
鍵山 ご自身の過酷なご体験を通じて生まれてきた言葉には、仏教にも通ずるものがあるので、仏教詩人といわれるのでしようね。
寺田 八歳の時にお父様が四十二歳で亡くなられ、お母様が女手一つで、真民先生はじめ五人のごきょうだいを苦勞して育てられたわけですね。学校を出て女学校の教師として朝鮮に渡られ、そこで二回も応召となります。そこで大変な苦勞をされたでしょうし、終戦後日本に戻られてから再び教職に就かれ、お嬢さん三人を抱えて貧しさの中で慎ましい生活を続けられたこと、そしてご自身が大病を患われたことも大きな節目だったと思います。
真民先生の詩は、まさにそうした実体験から生まれてくるものばかりですから、人々に生き方を示し、励まし、勇気を与えてくれるのでしよう。やはり人間は、そういう辛酸をなめな



イエローハットの西日本物流センター(山口)にある詩碑。「二度とない人生だから」が全文刻まれている

ければ一人前にならないのでしょね。鍵山 人間というのは側(た)から見ると、せそに見える人でも、何かしら悩みや問題を抱えて生きています。

実践の人・森信三氏との邂逅

鍵山 人間というのは側(た)から見ると、せそに見える人でも、何かしら悩みや問題を抱えて生きています。そういう時に、人に親切にしたり、励ましたりすることによって、自分の辛さや苦しみが和らげられて小さくなっていくのです。これは日本人特有の知恵でもあったと思うのですが、かつて

道を貫く原動力になったのではないかと思います。実践の人・森信三氏との邂逅 鍵山 一道を貫くということでは、私が長年師事しておりました教育者・森信三先生との出逢いも、一つの大きな転機だったと思います。

鍵山 一道を貫くということでは、私が長年師事しておりました教育者・森信三先生との出逢いも、一つの大きな転機だったと思います。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

です。それを、詩一筋に歩むべきだと断固としておっしゃったことは、すごいことだと私は思います。

寺田 二丁チエだったと思いますが、偉大な人は方向を示す人だ、といった意味のことを言っていますね。だから森先生が真民先生に、国民詩人としての道を歩むよう、方向を指し示したことは立派だと思えますね。

寺田 昭和三十七年、真民先生が五十三歳、森先生が六十六歳。森先生が宇和島に講演においでになって、旅館にいらつしやるというのでお訪ねになった。詩をやるか、短歌をやるか迷った。短歌をやる者はたくさんいるから、詩をやりなさいと言われたが、腹(はら)が決まらず、三回訪ねて決心がついた。それで『詩国』の発刊を決意されたのです。ですから、森先生との出逢いがなければ『詩国』の創刊もなかったし、今日まで四十年以上、一回も休むことなく発刊し続けることもできなかったらうとおっしゃっています。

勇気と希望と力を与える詩

鍵山 詩というと普通はごく一部の愛好家に読まれるだけで、広く一般に読まれることはまれですが、真民先生の場合は、先生の詩の言葉を刻んだ石碑が、いまでは全国で六百八番基も建っています。こういう詩人は、ほかにはいないと思います。

寺田 私事ですが、私もいま地元でやつております読書会が二百回に達した記念に「念ずれば花ひらく」の真言

碑を建てたいと思い、真民先生のご了解をいただいたところです。

この真言碑は昭和四十五年、京都で帯会社を経営しておられた伊豆蔵福治郎という人が初めて建てられた。当時真民先生は、本の帯に使われていた高級和紙を図書館からもらってきては、その裏に「念ずれば花ひらく」と書いて親しい人に送っておられた。その一枚が一燈園の石川洋さんのところにあって、それを見た伊豆蔵さんが大変感動して、京都の常照寺というお寺に建てられたのが始まりでした。

鍵山 伊豆蔵さんも立派ですね。「念ずれば花ひらく」という言葉にパッと目を留められて、それを碑の建立にまで結びつけるというのは大変なことだと思います。普通ならば、いいなあと思ってもそれでおしまいですよ。

寺田 真民先生は四年生まれで、お

生まれになった時に鷓鴣(こひね)がやって来て祝福してくれたとお母様から聞かされたそう、鳥が好きだ、鳥の縁でよき人々と巡り合ったといつもおっしゃっています。

鍵山 鳥といえば、真民先生の「鳥は飛ばねばならぬ」という詩もいい詩ですね。

鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ
怒濤(とたう)の海を
飛びゆく鳥のように
混沌(こんとん)の世を
生きねばならぬ
鳥は本能的に
暗黒を突破すれば
光明の島に着くことを知っている
そのように人も
一寸先は闇(くらやみ)ではなく
光であることを知らねばならぬ
新しい年を迎えた日の朝
わたしに与えられた命題
鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ

私はこの詩を真民先生に何枚も書いていただいた額にしたのですが、どうしても欲しいという方がたくさんいら

つしゃって、これまで随分たくさん贈呈しました。

寺田 この詩は、どん底を体験した人に響く言葉ですね。やはり真民先生という方は、悩める人、生きるのが辛い人、そういう人に本当に勇気と希望と力を与える詩をお書きになった人ですね。

妻への祈り 日本への祈り

寺田 除幕式の時に鳥が飛んできた話もそうですが、真民先生の愛読者の会「朴の会」で卓話をされる時には、雨が降っていてもやむなど、真民先生に関連する行事がある時には、いつも何か不思議なことが起るのですね。やはりこれは真民先生の念の力、祈りの力によるものだと私は思います。毎日未明混沌の午前零時に起き、一日も欠かさずに祈り続けてきたのだから、天候ぐらいは聞いてくださるであろうという信仰、信念を持っていらつしやいます。

鍵山 昔から偉大な修行を終えた人たちが奇跡を生み出すというのは、そういうことだと思うのですね。

実は、平成十二年に山口市にある当社の物流センターで「全国朴の会」を開催させていただいた時、その日はと

ても穏やかなお天気でしたが、真民先生の講話中に突然天地を揺るがすような凄まじい雷鳴が鳴り響いたのです。会場のざわめきが収まった後、真民先生はひと言「これも偶然ではない」とおっしゃいました。そこに参加した約八百名の人は皆、先生のおっしゃることに心の底から納得したものです。

寺田 祈りという事で申し上げれば、病気で倒れた奥様への祈りというものも、作品の中に色濃く出ていますね。くも膜下出血で倒れられて、もうかれこれ十年ずっと看護し続けてこられました。真民先生は、自分の力が足らんばかりに申し訳ない、というような思いを抱きながら毎日を通していらつしゃって、それが詩にも反映していることがよく分かります。

鍵山 奥様のことを詩に書かれる時には、祈るような気持ちで書いておられるのでしょうか。

寺田 だから真民先生という方は、祈りの詩人ともいえますね。そして、奥様が倒れられてからの詩が、以前のものと比べると少し変わってきているのではないかと思います。

ですから、森先生に出逢って『詩国』の発行をお始めになったことが真民先生の一つの転機だと思えますが、もう

一つ大きな転機を挙げるとすれば、この奥様のご病氣だと私は思うのです。

鍵山 私もそれは感じています。いただいた書を拝見しても、以前のものともう明らかに違ってきていますね。私は書について専門的な知識はありませんので、うまく解説することはできませんが、書体にだんだん力がこもってきて、ますますよくなっていることを感じます。

寺田 力強くて、輝いてきていることと、何かまるやがになつた感じがしますね。

祈りということでもさらに申し上げますと、真民先生の中ではもう一つ、日本はこれでいいの、かどう、日本の将来に對する深い憂いを持っていらつしゃって、それが最近の詩にはよく出ていますね。例えば、「祖国最大の危機」という詩があります。

明治、大正、昭和、平成と生きてきて

いくつかの危機に直面したが顧みる

国民に士氣というものがあ

危機は回避されたところが平成七年の危機は国民に士氣なく

ことです。

野球のイチロー選手が子どもたちから、大リーガーになるにはどういう努力をしたらいいかと聞かれて、絶対にバットを横倒しにして芝生の上に置いたりしないことだ、と答えたそうです。

寺田 ああ、それはすごい言葉ですね。お遍路さんは決して杖を地べたに置かず、洗って床の間に置きますが、それはお大師さんとともに歩くんだから、ということですね。彼はきつとそういうことにも通ずるような心掛けで野球をやっているのでしょうか。

鍵山 そのことをイチロー選手は子どもにも分かるように、バットが地べたの水分を吸えば何億分の一の狂いが出る。そういうところまで気をつけなければ駄目だと教えているそうです。

寺田 やはり心掛けが違うんですね、私は真民先生の詩を通じて、そういう信の世界というものを生涯かけて学びとらせていただきたいと思っています。

鍵山 真民先生の詩から学ぶことは、その人その人の過去の体験、現在の境遇や生活態度によって千差万別だと思います。同じ言葉だから誰もが同じように感ずるということは決してないでしょう。むしろ、真民先生の詩を見ても何も感じない人のほうが多いと思

金、金、金、すべては金というかつてない民となり亡国のきざしが

いよいよ深くなった感がする

敷島の和の国よその民よ

民に課された宇宙的な使命を知れ

明治生まれの真民先生は、日本の一番の危機はいまだとおっしゃって

鍵山 それはもう強く感じておられると思います。私のような凡人でさえ、日本は一体こんなことでいいの、かという憂いを、あらゆる現象から感ずるわけですから。ましてや真民先生のように鋭い洞察力、感受性を備えた方から見れば、ほんのちよつとしたことからでも感じていらつしゃると思います。

愚鈍にひたすら一道を歩む

寺田 先ほどの森信三先生もそうですが、真民先生のこれまでの人生に大きな影響を与えた人というのが幾人がいらつしゃいますね。霊的な救い主・杉村春彦先生をはじめ、利根白泉先生、手島郁郎先生、山本空外先生、田

ます。ですから私は、真民先生の詩が素晴らしい詩であると感動できることそのものが幸せだと思えますね。

寺田 先生は『詩国』五百号を成就するまでは死ねん、ということまで頑張ってこられました。これからもまだまだ頑張っていただきたいですね。

鍵山 先ほど寺田先生が、真民先生が信奉された方々を挙げてくださいましたが、皆さんいづれも志半ばで世を去っていった人ばかりです。この人たちの志をより多くの人に分かりやすく伝えていく。真民先生には、まだまだそういう役割を背負っていただきたいと私は思います。ですから『詩国』五百号は一つの区切りにしか過ぎないと思

寺田 真民先生には「延命の願」という詩もありますが、以前私に、師である森先生が九十七歳だから、弟子たる者はせめて師の年齢を越えなさいとおっしゃいました。その真民先生自身も、私は森先生の弟子ですとお書きになつていますから、真民先生自身にもせひとも九十七歳を越えていただきたいですね。そして、これからも人に勇気と希望を与える詩をたくさん作っていただきたいと思

中一村先生、星野道夫さん。共通するのは、どなたも一つの道を貫かれた方だということ。

それから、真民先生を語る上で欠かすことのできないのが、「遍上人です。『遍上人』という方は衆生済度のために『南無阿彌陀仏』決定往生六十万人」と書いた札を配って歩かれたのですが、その賦算は二十五万七千二百二十四人で終わってしまった。『詩国』はもともとその一遍上人の願を引き継がれて真民先生がお始めになったものですね。これを書くことがお札の代わりであるとおっしゃって、四十年以上にわたり毎月千二百人の方に無償で発送されてこられたわけ

鍵山 もう既に一遍上人の願をはるかに超える行をなさったわけで、それこそ後世に残る偉大な業績を残されたと思

寺田 九十二歳くらいまでは、その宛名書きから切手貼りまですべてご自分の手で行ってこられたと。そして一通一通封をする時に、相手の幸せを願いながら「ふっ」と息を吹き込んでいたそうです。これは札を渡すよりも大変な行ですね。

そのようにご自身が「道を歩まれてきたからこそ、道を究めた人に共感

坂村真民(日一言)
坂村真民(歳言詩集)
天を仰いで
西澤孝一編
致知出版社



追悼 伊與田覺先生

音も無くそつと散りゆく楫の葉か——伊與田覺先生辭世の句

去る平成二十八年十一月二十五日、伊與田覺先生 の人間学』を手始めに数多くの書籍を上梓いたただが、お亡くなりになりました。享年百一でした。 きました。中でも最後の著書となった『「孝経」を 碩学・安岡正篤先生の志を継ぎ、東洋先賢の教智 素読する』は、百一歳の先生が後世への祈りを込め にもとづく人間教育に生涯を捧げた、求道一途の人 て認められた珠玉の一冊です。 生でした。弊社もその道縁に恵まれ、多岐にわたる 書籍の刊行に加えて十年に及ぶ連続講座での ご指導を賜ってまいりました。 ご講話、八年に及ぶ「巻頭の言葉」のご執筆など、 七歳でご母堂を失い、寂しさを克服するために そのご恩は計り知れませんが、奇しくも本誌平成 始めた『論語』の素読を、生涯にわたり実践。その 二十九年一月号掲載の「巻頭の言葉」が先生の絶筆 功徳は内から滲み出る風韻となり、一言一句に万鈞 となりました。 の重みをもたらし、多くの人を感化しました。 ここに生前ご縁の深かった方々のお言葉をこ 致知出版社からは平成十八年の『人に長たる者』 紹介し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

致知 2017-2



最後まで現役の教育者だった父

伊與田安正

父は十一月二十五日の朝、自宅 におきまして家族に見守られて安らかに百一歳の生涯を閉じました。 父は皆様ご存じのように、幼少の頃に『論語』に出合い、約一世

紀という長い人生の大半、『論語』の普及を中心とした人生を生きてまいりました。その間、父が何を考え、どのような行動をしてきたかにつきましても、講演や書物を

とおして私たち家族以上にご存じの方も多いのではないかと思ひます。 父は最後まで現役の教育者でした。皆様と直接向き合い、孔子様

や安岡正篤先生をはじめとした先哲の教え、また自分の生きてきた様を、年を重ねたありのままの姿でお伝えし、命を閉じることができれば本望であると考えておりま

した。父はまさに亡くなる直前まで、日本を道徳の心を持った本来の姿に戻したいと声が出る限り、熱く語っておりました。 父の楽しみに毎晩のぐい飲みいっぱいの晩酌がありました。これも直前まで続けておりました。あちらの世界を垣見始めた頃から

ベッドの上に身を起し、まさにそこにぐい飲みがあるが如く柔らかな手に持ち、ゆっくりと口に近づけ、本当にお酒があるが如く飲み、最後には両手で持って飲み干し、また元の場所に静かに戻すということをしておりました。その流れるような仕草は父独特の晩酌

の作法でした。 二十五日の朝、お酒と、天満宮のご神水を混ぜて温めたものを綿に浸ませ、父の口に入れますと、父は穏やかな顔で美味しそうに吸い、そして飲みました。それからほどなくして、安らかに息を引き取りました。ほろ酔い加減であち

らに行ったのではないかと思ひます。まさに末期の水であり、末期の酒であったと思ひます。 父は最後まで充実した人生を送ることができたと思ひます。これもひとえに皆様方のお陰と、心より御礼申し上げます。 (告別式の喪主ご挨拶より)



人生の師父との道縁に感謝

全国木鶏クラブ代表世話人会会長 三木英一

永年に亘って御教導を賜わりました伊與田覺先生が、平成二十八年十一月二十五日に御逝去された報に接し、私は二十九日に箕面市立聖苑で執り行われた御葬儀告別式に参列致しました。

胸元に先生御自身が心を籠めて謹書なされた『仮名論語』を抱えて、お棺に安らかに眠っておられる神々しい御尊顔を拝し、筆舌に尽くせぬ淋しさを感しながら、今までに頂きまして有難い道縁と深

い学恩に衷心より感謝申し上げます。お別れを致しました。ここに謹んで思ひ出の一端を認めさせて頂きます。 私は四十歳代半ばから日本精神と東洋思想の探求に精を出してき

ました。そして伊與田先生の御講話を拝聴する機会にも恵まれ、大変感動致しました。入手した『仮名論語』には、「三木英一 道契座 右一貫 後学有源山人」とサインをして下さいました。そして今日

まで毎日、その『仮名論語』の素読を続けて参りました。 平成三年五月にはお山の成人教育学研修所上がり、宿泊研修を受けました。先生の人間味溢れる御講義は勿論のこと、素晴らしい立居振舞に直に接し、感慨を深くしました。それ以来二十五年に亘って親しく有難い御指導を受けて参

りました。 平成二十四年十一月二十三日には、姫路木鶏クラブ創立二十五周年記念大会に於て、『論語に学ぶ人間学』と題して、先生ならではの含蓄のある記念講演を賜わりました。月例会では、『人に長たる者』の人間学』も学ばせて頂きました。

平成二十八年九月十九日の有源招魂社先哲例大祭では四條畷神社会館に於て、不肖の弟子の私が、『中庸の教えに導かれて』と題して、子思子の教えについて講話させて頂くという有難い御縁まで与えられました。

て下さった「巻頭の言葉」も今年一月号が残念ながら絶筆になりました。全部別ファイルにして繰り返し拝読しております。思ひ出は尽きませんが機会ある毎に父親の如く論じて下さいましたことに感謝し、追悼の言葉と致します。 伊與田覺先生、有難うございませ